

## 初代編集者東基吉を通してみる

### 『幼児の教育』創刊の時代（上）

国 吉 栄

#### はじめに

『婦人と子ども』を創刊号から一頁ずつ、楽しみながら繰っていくと、その歩みの移り変わりの様が自然に伝わってくる。雑誌とは不思議なものだ。おびただしく雑多なものが丸ごとつめ込まれていて、その豊かさは一般書籍の比ではない。発刊当時には気にもとめられなかったであろうことが、後に振り返ってみると、時間を経たが

ゆえに一層鮮やかに浮かび上がってくる。何と良い過去への導き手であることが。

私たちは言葉を使う時、意識的、無意識的選択を行っている。書かれた文字になると選択は一層顕著になる。あるものが表現された時、その背後には常に表現されなかったものが存在するのである。一方読み手は、広げられた言葉の網目から意味を拾おうと試みる。その結果、

読み手の側が、表につなぎ止められたもののどれを選択するか、つなぎとめられなかったものをいかにすくい上げるかによって、それらが語るものは異なってくる。それが実は、ほとんどあらゆる学問が共通して持っている課題であり、またおそらくは楽しみであるとも言えるのではないだろうか。研究者自身が生かされるのは、まさにその点であろうから。

『幼児の教育』は明治三四年創刊以来今日まで、ほとんど休まず発刊されてきた希有な雑誌である。八十年にわたる歳月はそれだけで何ものにもかえがたい力である。しかし、明治以来の歴史と、掲載論説の多くが、各時代の保育界のオピニオン・リーダーたちのものであったがために、かえってその「読み方」「読まれ方」が限定的なものになってきたきらいがある。しかし今、高く積まれた合本の山が語るのには、むしろ、雑誌が偶然に今日まで伝えてしまった無意識的な雑多なものの方であろう。

雑誌は、生きて読まれていた時代のものである。雑誌自身に語りしめることによって、雑誌のその時代における意味、掲載されたものの意味、そして、時代そのものが明らかにされるのではないだろうか。それによって、あるいは今までとは違った雑誌像・人物像・時代像が出てくるかもしれない。

私はこのような観点に立って『幼児の教育』創刊の時代を、「初代編集者」東基吉に焦点を当てて、再現、再考しようとした。

## Ⅰ節 創刊をめぐる疑問

### 第一章 「初代編集者」東基吉

東基吉ははたして初代編集者か

東基吉が雑誌『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）の初代編集者であったことはよく知られている。「事実」である。しかし、東基吉の同誌における位置は、実はそれほど明確にされているわけではない。東基吉と『婦人

と子ども』の関係について述べたいいくつかの研究書に見られる微妙な違いがそれを示している。

例えば、「明治保育文献集」別巻に収められた「幼稚園保育法解説」(1)には、「……彼(東基吉)の研究は着々と『幼稚園保育法』の完成へと進められるとともに、一方において広く保姆や母親たちを啓蒙するために雑誌の必要を感じ、フレーベル総会にはかり、機関誌『婦人と子ども』を発行することとなり、彼はその編集責任者となった……」とあり、東は雑誌発行の発案者として、また編集責任者として位置づけられている。

また、同書の『幼稚園摘葉』解説(2)では、「……彼(中村五六)は明治三十一年(三十三年の誤植である)東京女高師教授となった東基吉を幼稚園批評係として迎え入れ……、「フレーベル会」の機関誌『婦人と子ども』の編集にあたらせたり……」となっている。ここでは、『婦人と子ども』編集に当たったのは東であったが、雑誌発行の発案者もしくは責任者ではなかった、と言っているように思われる。

津守・久保・本田共著『幼稚園の歴史』には、「この雑誌の計画・発刊・そして編集に直接携わったのは、当時東京女高師(助)教授であり、附属幼稚園批評掛を兼ねていた東基吉である……」。「……このような状況にあつて、研究や意見の発表機関をもつ必要を感じ、東基吉が中心となって、フレーベル会の機関誌とし『婦人と子ども』を明治三十四年に発行することになったのである」(3)とある。ここでは、『婦人と子ども』の計画・発刊・編集に直接携わったのは東基吉であったと明言されている。「直接」と、ただし書きとも思われる言葉が書かれているのは、「名目上はともかく、実質的には」という意味が含まれているのかもしれない。

これらの文献に見られる微妙な違いは、どこから来ているのであろうか。

『婦人と子ども』創刊の事情は、『幼児の教育』第五〇巻一一号(昭和二六年)に、「婦人と子ども創刊当時の子どもと其頃の幼稚園の状況に就いて」と題して、東基

吉自身によって次のように語られている。「(正しい幼稚園教育思想を一般に普及させるといふ念願を達成するためには) 自分の手に研究なり意見なりの発表機関を持つて居なければなりません。其処で考え付いたのは、当時存在して居たフレイベル会……の機関雑誌を發行することでした」。「そこで私は、明治三十四年のフレイベル会の總會にこの機関雑誌發行の案を提出しました」。「夫から雑誌發行の条件は次のようでした 一、編集一切は私が担当する……」(傍点筆者)。東はこの回想記の中で、以上のように、自分が『婦人と子ども』發刊を發案した(中の少なくとも一人である)こと、また、その初代編集者であったと述べている。

東のこの回想記は、『幼児の教育』の歴史にとって非常に意味深いものである。なぜなら、これこそ、他ならぬ『幼児の教育』自身が、初代編集者の名を明らかにした最初だったからである。創刊から実に五〇年を経ての發言であった。東在任中には、奥付はもちろん、文中にもでてこない。東のこの回想記以前に「編集者東基吉」

を述べたものとしては、倉橋・新庄共著『日本幼稚園史』所収の下田たづの手記があるが、先に引用した研究書は文面からみて、いずれも多かれ少なかれこの東の文に拠っていると考えられるのである。「初代編集者東基吉」は、主として東自身の回想記という淡い土台の上に成り立っていると見える。

#### 雑誌に聞く

とは言え、『幼児の教育』創刊五〇周年に当たって、同誌編集部が東に前出の原稿を依頼したことそのものが、東が初代編集者であったことの不動の証しであるとも言える。しかしここでは、東が編集に携わったと考えられる創刊号から第七巻あたりまでの誌面そのものから、東基吉の同誌における位置を明らかにしてみたい。

東の誌面への現れ方でとりわけ目をひくのは、彼が幾つもの筆名を使っていることである。はっきりしているだけでも五つある。筆名の多さは、同誌に対する意気込みの大きさ、また多様な関心を示していると言えるだろ

う。と同時に、筆名は、本名を表わさないという働きを担っている。

なかでも最も多用されたのは、〈牧羊〉あるいは〈東牧羊〉で、この筆名で著わされた文だけでも本名で書かれたものより多い。この筆名で東は、「読書につきて」（三巻二・三号）、「安井河野二氏を送る」（四巻二号）、「家庭と蔬菜栽培」（六巻八号）など、かなり自由に題材を拾って書いており、この筆名の中に「編集者」の姿をみることができる。中でも五巻一号の「第五歳を迎ふ」と題する文は、特に「編集責任者」としての東の立場を鮮明にあらわしているといえる。この種の文は、同誌五〇巻を記念して書かれた「幼児の教育半世紀の辞 本誌主幹・倉橋惣三」（五〇巻一二号）にみられるように、本来、主幹の立場にいるものが書くのが通例であろう。この時、主幹は中村五六であるが、「第五歳を迎ふ」という文が、〈牧羊〉すなわち東基吉によって書かれているということからみて、東が役名を持たないにもかかわらず、編集者であるばかりか、実質的には主幹にかかわ

る仕事も分担していたと考えられるのである。ただし、その署名が「東基吉」ではなく、小さな括弧入りの〈牧羊〉であった点に、影の働き手としての東の姿を見ることができよう。

同誌に最も早く登場した東の筆名は〈撃水生〉であった。東はこの筆名で、創刊号から三巻まで折にふれて「英語俚諺解」「読書余録」と題する連載や、随想、訓話を書いている。「英語俚諺解」のはじめに東は、「……で、本誌に向けて、いろいろ注文がある中で、英語のはなしを入れてほしいもんだといふのもあった……それも宜しいが……夫よりも一層あの国の諺でものせたら……一挙兩得だと思ったから……本号からつづけて載せることにしたわけである」（一卷四号）と書いているが、これなども実質的に誌面の構成に責任をもっている「編集者」の言であるう。

これらのことからみて、東が『婦人と子ども』の実質的な編集責任者であったことは疑いない。従って興味の所在は、東が『婦人と子ども』の初代編集者であったか

否かではなく、そうであったにもかかわらず、その自明なことが自明なこととして活字の形で東在任中に残されなかつた点にある。後に続く和田実や倉橋惣三が、編集者としてその名をはっきりと誌上に留めていることを思うと、彼の同誌における位置が他の編集者たちのそれとは違うことを感じさせる。当時の『婦人と子ども』が編集者の名を明らかにしなかつたということは、「その時代」を解く鍵としてすくい上げるに足ることからではないだろうか。

## 第二章 創刊に至る経緯

### 東基吉招聘

東基吉が東京女子高等師範学校附属幼稚園批評掛に任ずという辞令を拝したのは明治三三年四月、『婦人と子ども』創刊の前年であった。「当時幼稚園教育のことなどには全く無知であった私はちょっとがっかりしましたが……」(4)という突然の任命であった。この任命を受

けて「幼稚園のイロハから勉強」(5)しはじめた彼が、翌三四年一月には日本で初めての幼児教育雑誌を創刊に至らしめ、その創刊号には堂々と自身の保育論を掲載している。その間わずかに九か月。今日の目をもってすれば、実に驚くべきことである。

しかし、そもそも東招聘の理由が幼児教育研究の推進にあつたとはいへ、その成果を幼稚園の保育の實際に還元させることよりも、外部に発表することの方により大きな期待がかけられていたと考えられるとすれば、この短時日の「雑誌発行」という出来事も納得のゆくところである。以下東招聘から『婦人と子ども』創刊までの日程を検討することによって、その間の事情を推察してみたい。

### 創刊に至る日程

これまで同誌発行は、明治二九年のフレール会創設時に決定されていたと考えられてきた。しかし、実際にはそうと断定しがたい。通常用いられている「フレール

ル会規則」(6)は創設時のものではなく、少なくとも明治三十一年四月以降のものと考えられるからである(7)。この件は「フレールベル会報告第一年、二年」を見ればすぐにわかることなのであるが、それを見つけられないでいる。従ってここでは、東基吉以前に雑誌発行が考えられなかったことではないにしても、具体的な形をとりはじめたのは東以後であったと考えたいと思う。

資料が足りないのではあるが、『婦人と子ども』の掲載記事から創刊の経緯をもう少し推し測ってみよう。

東は「明治三十四年のフレールベル会総会にこの機関誌発行の案を提出し」(8)たと述べているが、それは疑問である。フレールベル会総会は、フレールベルの誕生日四月二二日に開催される。『婦人と子ども』創刊が明治三十一年一月であるから、総会にかけたとすれば前年四月の総会であろうが、東着任が同じ月の初めであったから、すぐに機関誌創刊を総会に提出するということは考えにくい。この年の「フレールベル会報告」が入手できないので確証はできないが、仮りに三四年の総会に提出したのが

事実とすれば、東招聘は雑誌発行請負以外のなものでもないということになる。しかし、「機関誌発行の案提出」が「三十四年」の「総会」であったかどうかには疑問があるとしても、東がその具体案の提出者であったのは確かなように思われる。

創刊号一〇九頁に、明治三十三年二月一日に開かれたフレールベル会第一九回常会の記事があり、その折に「雑誌発行の件につきての質問」が出たと記録されている。

「雑誌発行の件」という記載の仕方から、雑誌発行についてはそれ以前に常会ですでに話が合ったどうかかわれているので、少なくとも十月の常会で話題にのぼっていたと考えられるのである。ただし、「雑誌発行の件につきての質問」(傍点筆者)という表現から、この件は常会で立案し、計画を積み上げてきたのではなく、「たき台」のようなものがすでに別の所で作られて、それが会に諮られたという状況であったと思われる。

東は前出の回想記の中で「そこで雑誌の名を何とつけ

るかという段になって、中村さん、盲啞学校長の小西信八先生、黒田先生、多田房之輔氏などを幼稚園に集まって貰って相談しました」と述べている。また、雑誌『保育』に掲載された東基吉・くめ夫妻訪問記「幼稚園黎明期を聞く」(9)には、「その頃フレイベル会というのがある……その機関誌として雑誌を発行しようとしたところが、それを聞いた多田房之輔という人物や、もう亡くなったが小西信八氏など四、五人が集まり経営や雑誌の名称などいろいろ相談した結果……」とある。両者多少の違いはあるが、「幼稚園批評掛」に求められていた役割に答える一つの方法として東自身が雑誌発行を具体化し、その対外的な枠組(誌名、経営等)を東を招聘した主だった人たちが並びにフレイベル会の重鎮と諮って決定した、ということだろう。これら四氏との談合は、常会への提案の関係から、最も遅い場合でも十月までに、おそらくはもっと早い時期に行われていたはずである。これ以上の日程の特定は現在のところできないが、着任後半年もたたないうちにここまで作業が進められてき

たことを考えると、彼の招聘が「雑誌発行」の伏線上に置かれていたと考えざるを得ないのである。おそらく東は、着任と同時に雑誌発行にむけてのスタートを切ったのであろう。そしてそれは、彼を招いた側の人々にとって期待するところであったと言えるのではないだろうか。

## 発行

明治三十三年一月一日の第一九回常会での質疑を受け、創刊号は年が明けて一月二六日印刷、同二九日発行された。二号は二月八日印刷、一日発行。早くも三号からは毎月二日印刷、五日発行のペースが守れるようになってい

る。当時、雑誌の刊行は今日の慣行とは違って、例えば七月号は七月に発行するというやり方であったようだ。原稿段階でも、今日では夏のうちから冬の分を手配・用意しなければ発行期日に間に合わない仕組になっているが、当時は原稿・編集・印刷・発行がすべてちょうど一



か月という、今日からみればうらやましいような、正に小気味よいサイクルで回っていた。打てば響く手ごたえである。それだからこそ投稿、質問などの読者との誌面を通しての交流、討論も生きてくる。「玉稿は毎月一日までに御寄贈相なりたく候」というお知らせも見受けられるが、『婦人と子ども』は毎月五日発行であるから、投稿から発行まで二〇日あまりしかかかっていないことになる。時には四月二〇日になされた講演の筆記録が早くも五月五日発行の五月号に掲載されるという超早わざが見られたりもする。従って創刊号の準備も印刷日ぎりぎりまで行われていたであろうし、また毎号の編集の実務は休みなく回転していたことであろう。

### 東基吉とフレーベル会

ところで、このように雑誌発行のため奮迅の努力をした東基吉と、その発行母体であるフレーベル会との関係はどうなっているのであろうか。『婦人と子ども』に掲載されたフレーベル会幹事会の報告には、出席した幹事

名の最後に必ず肩書なしの「東基吉氏」という記載がある。彼自身、「会に関する記事は皆私が書きました」<sup>(10)</sup>と言っているように、「機関誌」編集のため、東は毎回の幹事会に必ず出席している。しかし彼は妻くめと共にフレーベル会々員としてその名を連ねてはいたが、最後まで幹事になることはなく、名目上はただ一会員にとどまったまま雑誌編集の任に当たっていた(後に客員として名を連ねはするが)。そして、その後附属小学校批評係兼任となり、和田実にバトンを渡すまで縦横の活躍をしながら、それ以後は完全に誌上から姿を消してしまったのである。<sup>(11)</sup>

東基吉はこれらの点でも後に続く編集者たちとは全く対照的である。東時代の『婦人と子ども』とは何であったのか。東基吉をめぐるこれら小さな連和の数々は、初期の『婦人と子ども』を後の同誌の姿そのままから透かし見ることのむずかしさを語っている。あたかもこの時代を、一つの特別な時代として位置づけることを要求しているように思えるのだ。

## Ⅱ節 誌面にみる東基吉とその時代

このような過程を経て、明治三四年一月、『婦人と子ども』は創刊号にふさわしく多方面にわたる記事を満載してその一步を踏み出した。子ども・家庭・学術・講義・史伝・文苑・説林・研究・雑録・彙報の各欄がひしめいて、編集者の意気込みが直接に伝わってくる。本節では東時代の同誌の姿を明らかにするために、その中からいくつかを取り出して少し詳しくみていきたい。

### 第一章 子ども欄

大きな活字で組まれ子ども欄には翻案の童話・創作話・なぞなぞ・歌など盛りだくさんに掲載されている。自分で読むには児童に、大人に読んでもらえば幼児にも、という内容である。もちろん保育者が後で子どもに話をするための材料にもなる。この欄のため東は大いに活躍し、「グリムやアンデルセン其他日本橋の丸善に行つて西洋の童話の本をいろいろ探し出して、適当なものを

片端から翻訳したり翻案したり」<sup>(12)</sup>している。

これ以前に幼児のための話としてまとまったものは、明治二九年に刊行が始まった巖谷小波による叢書「日本お伽噺」だけであった。翻訳(案)ものとしては、初期の幼稚園でよく用いられたイソップが相当早くから訳出されていた。その「教訓」が受け入れられ易かったのか、古くから好んで読まれていたらしい。東の時代にはすでにかなり広く一般に供せられていたと考えられる。

イソップに比して、グリムやアンデルセンの訳出は遅れていた。アンデルセンは明治四四年になってようやく、まとまったものが相次いで紹介された。一つ一つの作品ごとではそれ以前から少しずつ訳出されている。明治二一年、巖本善治訳「不思議の新衣裳」(『女学雑誌』・本邦初訳)、河野政喜訳「諷世奇談・王様の新衣裳」(春祥堂・アンデルセン単行訳書の最初)、二五年、巖谷小波訳「極楽園」(『幼年雑誌』)などである。グリムのものでは二十年、菅了法訳「西洋故事神仙叢話」、四二年、和田垣謙三・星野久成訳「家庭お伽話」、単独の作

品としては上田万年訳「おほかみ」（三二年）がある。

⑬

これらは翻訳文学史上に残るものであるが、東が子ども欄のために訳出した作品もそれらと比肩しうるものである。例えば『婦人と子ども』一卷三号に掲載された「半太と小人」という話である。「むかしむかしある所に靴屋の半太とゆゑ正直者がありましたとさ……」で始まるこの物語は、明らかにグリムの「靴屋と小人」であろう。今まで知られている限りでは、この「半太と小人」が「靴屋と小人」の初訳である可能性が強い。

ところでここでももしろいのは、登場人物のいでたちである。私が子どもの頃読んだ「靴屋と小人」では、小さなズボンに小さなシャツ、それに小さなとんがり帽子をかぶった小人が描かれていたが、「半太と小人」の小人たちは、小さな着物に小さな羽織袴、おまけに小さな足袋まではいてうれしそうに走っていく。一方、それを見送るのは半太と、丸鬘に着物姿のお内儀である。どちらも靴とは縁のない姿である。このさし絵に思わずほ

えんでしまう。この熱意は、さし絵までも「和訳」したA・L・ハウの労作「母の遊戯及育児歌」（フレイベル）を思い起こさせる。

この時代は、他には少年向けとして片山平三郎訳「鷲ワシ 瓊ジュン児シラ回ワタリ島シマ記」（明治一三年）、森田思軒訳「十五少年」（明治二九年）、それにシュエヌ・ベルヌの冒険物位しかない時であったから、自ら子どものために童話を探して訳出するということは実に先駆的なことであった。『婦人と子ども』にはぜひ子どものための話を載せるのだという意気込みの直接の現れと言えよう。

翻訳ものの他にも、東は自ら「やまとの翁」と称して創作の話を子どもたちに贈っている。彼は子ども欄に特に力を入れており、他の欄には様々な変動があったにもかかわらず、この欄だけは彼が編集から遠ざかる直前まで続いていた。一卷では全体の一・四・二割が子ども欄であり、巻を経るごとにその割合は増えていく。五巻では実に半分を子ども欄が占めるまでになる。

## 「貞一の日記」

ページを繰るままにふと目にした東基吉の妻くめの「折にふれて」と題する歌に心を魅かれた。

紅染のうぶぎぬはんと手をとれば

まだみぬ稚児のおもかげにたつ

(三巻五号)

東夫妻の長男貞一氏は明治三六年五月三十一日に誕生した。この歌は間もなく生れ出する我が子を心待ちにし、なつかしく思い描く未来の母親の歌であると同時に、それを自ら編集する雑誌に掲載した未来の父親の思いが託されたものであった。一年後、四巻七号から「貞一の日記」が始まる。筆者は「その母」東くめである。「貞一の日記」には、食事、遊び、病気のことなど日常のことながら、親となった喜びと責任とに裏うちされながらも淡々とつづられている。初期の『婦人と子ども』はある意味でこの親子と共に歩んでいったと言える。

五巻三号で東は「ひむかし」という署名で「子供の病気につきて」と題する小文を書いて、幼児の下痢につい

て親の注意を促しているが、それに対応する時期の「貞一の日記」には、毎日下痢のことが書かれている。五巻六号には、これも自分の子どもの経験をもとに、「子供と間食」と題する文を書いている。「私共では子供に一切間食をさせないことに致して居ります。……余程迷ひましたが医師の勧めもあり、かたかた廃することにした。……」そして六巻四号では、「子どもの日記につきて」と題して、子どもの日記をつけることを勧めている。ちょうどその頃東は「育児日誌」を著しており、同じく四号に、「育児日誌」本月中発刊、という発売元弘道館の広告がでている。これは、『婦人と子ども』と東自身の子どものとの関わりが交差したところに生み出された一つの結実と言えよう。「貞一の日記」に表われたくめの記述と、それに対応する形で書かれている東の小文は東の関心のあり方がどんなものであったかを示しているように思われる。彼のここにおける関心は、狭義の保育研究というところにはなく、もっぱら我が子を育てる母親のために、ということにあったように思われる。

子に対する愛情の意識的な発露としての教育、というこ  
とをめざしていたのではないだろうか。これは、東時代  
の『婦人と子ども』を貫いている大きな流れの一つであ  
る。

この項では東くめについて一言しておきたい。くめ夫  
人は、「鳩ぼっぼ」「お正月」「水あそび」などの幼稚園  
唱歌の作詩者として知られており、『婦人と子ども』の  
文苑欄でも大いに活躍している。彼女が滝廉太郎らと共  
に「幼稚園唱歌」を出版したのは明治三四年、『婦人と  
子ども』創刊の年である。夫妻が時を同じくして幼児教  
育界に新風を送り込んだわけである。そして、東が編集  
を離れた後、全く『婦人と子ども』から姿を消してしま  
ったのと同様に、くめ夫人も「幼稚園唱歌」以後、子ど  
ものための歌を作っていない。このような彼女の中に、  
基吉の幼児教育界への関わり方と似たものが感じられ  
る。夫妻は共に草創の時代に幼児教育界に生きたのであ  
る。

(続く)

註

- 1 「明治保育文献集」日本らいぶらり 別巻205頁 (宍戸健夫 著)
- 2 前掲書217頁 (水野浩志著)
- 3 津守・久保・本田共著「幼稚園の歴史」厚生閣 昭31 231  
・270頁
- 4、5、8、10、12 東基吉「婦人と子ども創刊当時のこども  
と其頃の幼稚園の状況に就て」『幼児の教育』50巻11号
- 6 例えば日本保育学会「日本幼児保育史」第二巻161頁所載の  
もの
- 7 「フレイベル会報告第三年」の規則改正事項参照
- 9 「幼稚園黎明期を聞く」『保育』昭32・11号 ひかりのく  
に昭和出版
- 11 唯一の例外が東基吉の前掲文である。
- 13 以上、国立国会図書館編「明治大正昭和翻訳文学目録」風  
間書房 昭34 および「児童文学辞典」東京堂出版 昭45